

演題6. 某専修学校の学生における口臭強度の分布および関連要因

○森谷 俊樹, 岸 光男, 相澤 文恵
阿部 晶子, 米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

口腔および全身状態に特に問題がなく、口臭を主訴としない特定集団の口臭強度の分布を明らかにすることは、生理的な原因が口臭に与える影響を明らかにするうえで重要である。そこで本研究では、類似した日常生活をしている盛岡市内某専修学校の女子生徒24名(年齢:20.1±1.9)の口臭強度をハリメーター®にて測定し、その集団の口臭強度の分布および関連要因を分析した。

方法は平成11年8月下旬より同年11月下旬まで、毎週2名ずつ正午前に4日間、午後4時前に1日、口臭強度を測定した。口臭強度の測定には、口臭の主原因物質である揮発性硫化物質を計測するハリメーター®を使用した。また、口腔内診査およびアンケート(毎日の生活リズム)を行った。

その結果、対象者24名のハリメーター値からみた口臭強度が、境界域を中心に大きなばらつきをもち口臭の強くなっていると思われる人が半数の人にみられた。また食後あるいは歯磨き後の経過時間が長いほど口臭強度が強くなることから、口臭強度は時間とともに変化していた。舌苔スコアとハリメーター値の間に有意な関係が認められたが、これ以外の臨床的パラメーターおよび問診項目とハリメーター値との関係は有意ではなかった。

以上のことから、次のことが考えられる。

1. 口臭を主訴としない全身および口腔内が健康な人でも生理的な影響により口臭が強くなることを踏まえ、口臭を主訴とする患者を診断・診療・指導していく必要がある。
2. 実際の診療で口臭強度をハリメーター®等にて測定する場合、口臭強度が時間とともに変化することから、最低限同じ患者に対しては測定前の条件を均一にすることが必要である。
3. 口臭を主訴としない本研究対象者の中で口臭強度が高い人は舌苔の付着が多かったが、舌苔に影響を与える因子、他の要因が口臭強度に与える影響についてさらなる研究が必要である。

演題7. 本学歯学部附属病院口臭外来における「口臭についての質問票」に基づいた受診患者の特徴について

○米満 正美, 稲葉 大輔, 岸 光男
阿部 晶子, 相澤 文恵, 森谷 俊樹
染谷 美子

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

我々は口臭外来において、口臭を主訴として来院した患者に対しその実態を把握し治療を進める上での参考となる質問票を実施している。本年4月から来院した初診患者45名(男性16名, 女性29名)の各質問項目に対する回答について分析し、以下の結果を得た。

- ①性別来院者数は女性の方が多く、年代別では50代, 40代, 20代の順に多かった。
- ②約78%の者が1年以上前から口臭を意識していた。
- ③「口臭を意識したきっかけ」は「人から指摘された」が最も多く約73%であった。
- ④口臭の治療経験者は約67%であり、そのうちの約63%は歯科を受診していた。
- ⑤口腔内症状では「食片圧入」が82%と最も多く、次いで「口の中がねばねばする」が64%, 「舌が白い」が62%であり、「歯が動く」, 「唾液中に血や膿が混じる」がそれぞれ5%で最も少なかった。
- ⑥「1日のうち口臭を意識する時」では、「起床直後」が50%と最も多く、次いで「1日中」が41%, 「疲労時」が30%, 「空腹時」が27%の順であった。
- ⑦「口臭を意識する状況」では、「人との対話中」が87%と最も多く、次いで「相手の様子や態度」が69%, 「常に意識している」が47%であった。
- ⑧「口臭で困ること」では、「人と話ができない」が73%, 「全てに消極的になる」が62%であった。
- ⑨「口臭を減らすためにしていること」では、「含嗽剤・ガム・仁丹」が67%, 「歯磨き」が62%と多かった。
- ⑩CPITN最大コードと口臭を意識する時、および状況との間で関連があったのは、「空腹時」, 「緊張時」, 「乗り物・狭い場所」そして「常に意識している」であり、いずれもCPITN最大コードが小さい者で多く訴える傾向があった。

以上の結果より口臭を訴える患者の治療を行う場合、歯科疾患の治療のみならず、その人の生活状況を踏まえ、心理学的、行動科学的アプローチが必要であることが明らかとなった。